

# 院外茶話

vol.99 平成25年8月1日

「電線にスズメが3羽・・・」  
のどかな風景だったけど  
気がつけば電線の網の下で  
暮らしているような

## 電線は嫌いだ



自室の前はこんな風景です。

部屋のカーテンを開けると、目の前に太い電柱が見える。太いばかりでなく、途中に大きなトランスが乗っかって、ガイシがいくつもある。わけのわからないグレーの箱が3個もあって、電柱の上は小さな変電所のよう。

電線の種類も様々で、細いものから物干竿くらいの極太まで。ここにスズメが止まると、電線よりも細く見える。編み上げたようなものまであって縦、横、斜めに電線だらけ。数えてみたら横に走る線だけで16本もあった。

背ばかり高くてろくな働きもしない男のことを、電信柱と言ってからかったけど、そんな侮辱は当たらない。この電柱はものすごく働いているのがわかるから。それはありがたいことだけど、とにかく見た目が悪い。

こんな電線を見て暮らすのは、不愉快だけど、津々浦々電気のないところはない。

能登半島の先っぽにランプの宿があると聞いて、わざわざ出かけたことがあった。確かに食堂はランプの明かりだけで薄暗く、何を食べたわからない。

でも、廊下には電気がついていたし、洞窟風

呂のお湯はライトアップがされていた。ランプの宿とは、ランプがある宿であって、電気のない宿ではなかった。

その電気を運ぶために、かつては木製の電柱が立って、せいぜい4本くらいの電線が渡って、スズメがよく似合っていた。ちょっと高いところからは、アルミの傘を被った薄暗い街路灯が道を照らしていた。この明りのおかげで私の父は、泥酔をしても千鳥足で寿司折ぶら下げて、我が家までたどり着けたのだと思う。

目の高さには質屋やコーシン牛乳の広告が貼ってあった。手の届かない2メートルくらいの高さから、作業の足場となるボルトが等間隔に取り付けられていて、当時はここをよじ登って空き巣が入ったものだけど、盗むものと言えばラジオや置き時計。何ともものどかな時代だった。空き巣は本当に唐草模様の風呂敷を使ったのだろうか。

しかし、今や電柱はコンクリートに変わり、電線はどんどん増えて、街の上空は複々線どころの騒ぎではない。交差点ともなればまさに網の目。



普通の住宅街でも電線はこの数です。

ヨーロッパの都市がなぜ綺麗に見えるか。それは電線がないから。実際、ロンドンもパリもボンも、電線は全部地中に埋まって、どこの街にも解放感がある。日本の道路も電柱の替わりに、鋳物製の街路灯でも並べたら、さぞかし風

情が出るだろうに。困るのは、カラスと犬のおしっこくらいだと思う。

その電線の地中化が、日本でも進んでいるとは聞くが、まだまだ幹線だけで、それも半分程度。一步路地に入ればどこも線だらけ。そろそろ世界遺産の声も聞こえると言うのに、電線を入れずに富士山の写真をとるのは、至難の技なのである。

では、その電線を全部地下に埋めるためには、どうすればよいか。その前に、公共の道路に立っている電柱とは一体誰のものか。

一口に電柱と言うけれど、それには電信柱と電力柱の2種類があって、耳慣れないのは電力柱の方。もともとの電柱とは電気通信用のための電信柱で、具体的にはNTTのものであった。

そこに電力を送るための電力会社が加わったので、電柱によっては所有者が異なるのである。昨今送電分離と言って騒いでいるのは電力柱の方で、これは電力会社のもの。

ただ、実態はそう単純なものではなく、今の電柱はNTTと電力会社が共同で使用しているはず。我が家の前を横切っている電線にはUSENとか、itscomなどと書かれたものがあり、ことはもっと複雑なのだろう。

電柱も電線だけを支えていればよい、という時代ではなくて、電柱広告から信号機、果ては交通標識の設置までがその役割。

これを全部地下に埋めることが、いかに難しいか。それは理解ができる。しかし、ヨーロッパでできたことが、何故日本でできないか。何が障害になるのか。

日本の道は狭いから、頭上にあったトランスを置く場所がない。木造建築が多くて、度々家を建てなおすから頻繁な工事が必要。地震が多い。雨が多い。

いろいろ理屈はつくだろうけど、最大の理由はこれまで経済を優先して、あまりに景観に無頓着だったこと。大気や河川の公害問題も、経済を優先してきた結果であった。

原発やら高額な役員の報酬やら、電力会社はなにかと風当たりが強いけど、電線にも少し配慮をしてくれないものか。

これからは経済面だけでなく、心地よい暮らしが必要で、住んでいる場所の景観は重要な要素である。私は大概のことは日本に誇りをもっているけれど、こと電柱に関しては、西洋に憧れをもつ。

この百年の間に西洋のほとんどのものは日本に入ってきた。いながらにしてフレンチもイタリアンも口にできる。シャネルもグッチも手に入る。見渡せば車はベンツだらけ。お姉さんから、おばさんまで茶髪。どこを見ても日本の影は薄くなった。

これで東京の街から電柱が消えて、隅田川や多摩川がウォーターフロントになれば、本物のヨーロッパを見るまでもないだろう。

フラメンコはスペインまで行かなくても、新宿で見ることができる。ローマの遺跡や闘牛はDVDで見よう。

こんな声が届いたわけでもあるまいが、最近新しい街から電柱が消えた。かつてゴールデン・カップスが本拠地とした本牧の街はすっかりリメイクをされて電線がない。不良っぽいイメージがあった街なのに、やればできるじゃないか。

みんな携帯電話になって、これからは電信柱も少なくても済むだろう。ソーラーパネルが普及をすれば電力だって地産地消。

私がいなくなるのと、電柱がいなくなるのと、どっちが早いかな。



自由が丘南口の遊歩道。世田谷側。



同じ遊歩道で電柱のない目黒側。